



Title	中国語話者を対象とする日本漢字音教育のための基礎的研究：日本語能力試験2級漢語を中心として
Author(s)	汪，南雁
Citation	大阪大学，2016，博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55709
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (汪 南 雁)	
論文題名	中国語話者を対象とする日本漢字音教育のための基礎的研究 －日本語能力試験2級漢語を中心として－
論文内容の要旨	
これまでの日本語教育においては、中国語話者だから漢字は分かるだろうという考えによって、学習者も日本語教師も漢字学習・教育をなおざりにする傾向があった。しかし、近年、漢字圏の学習者に対する漢字教育の必要性は、多くの研究者及び日本語教育現場の教師によって指摘されてきた。その中で、如何にして漢字の読み能力を向上させるかは、中国語を母語とする日本語学習者（以下、中国語話者）を対象とする日本語漢字教育上の重要な課題の1つである。この課題を解決するためには、現代中国語音と日本漢字音の関係を正確に把握し、それを有効に利用することが必要だと考える。しかし、現代中国語音と日本漢字音の関係について、不明な点が多く、中国語話者を対象とする日本漢字音教育のための基礎的研究は未だ不十分である。そこで、本研究では、その基礎的研究と、実践に向けた研究の第1ステップ及びそれに関する検証を行った。 本論文は序論、本論、結論で構成されている。そのうち、本論は、さらに3段階に分けることができる。第一段階（第2～4章）では、日本漢字音教育現場で活用可能であり、かつ効率がよい現代中国語音と日本漢字音の対応規則を導き出すための分析と検討を行った。第二段階（第5章）では、日本漢字音習得上の問題点を調査し明らかにした。第三段階（第6～7章）では、システムデザインに向けた検討を行い、WEB教材を試作し、その学習効果を見定め、教材改良に向けた検討を行った。このうち、第2章は先行研究のまとめ、第3～5章は本研究の主要部で、第6章と第7章は実践に向けた研究の第1ステップである。以下、各章の概要を述べる。 第1章では、本研究の背景、本研究の目的と本論文の構成を述べた。本研究の目的は、現代中国語音と日本漢字音の関係を明らかにし、日本漢字音教育のための基礎的研究を行うことである。そして、その基礎的研究に基づき、初級段階を終えた旧日本語能力試験（以下、旧試験）3級レベルの中国語話者が旧試験2級新出漢語（以下、2級新出漢語）及びそこで使われている漢字（以下、2級新出漢字）を効率よく学習するためのシステムデザインを行うことである。 第2章では、先行研究に基づき、日本漢字音と中国語音（中古音と現代中国語音）を概観し、中古音と現代中国語音の対応関係と、中古音と日本漢字音の対応関係を整理して提示した。 第3章では、まず、中古音を介して現代中国語音と日本漢字音の対応関係を導き出した。次に、旧試験2級漢語（以下、2級漢語）で使われている漢字（以下、2級漢字）に限定した場合の対応関係の分析を行った。具体的には、3.1では、第2章で整理した対応関係（中古音と現代中国語音の対応関係、中古音と日本漢字音の対応関係）を基に、中古音を介して現代中国語音と日本漢字音の対応関係を導き出し、その特徴について検討した。その結果、先行研究で既に明らかにされた特徴に加え、「a韻母」「ia韻母」などの18韻母で読む漢字は「ク/ツ/チ/キ」で終わる可能性があることや、「a韻母」「e韻母」などの12韻母で読む漢字は長音となる場合があることなど、合計6つの特徴が抽出できた。3.2では、2級漢字に限定した場合の対応関係を調査し、中古音を介して導き出した漢字全体に適用可能な対応関係と比較分析を行った。その結果、2級漢字に限定した場合の対応関係は、全体の対応関係に概ね一致することが分かった。このことから、3.1で導き出した現代中国語音と日本漢字音の対応関係は、今後中国語話者を対象とする日本漢字音研究の基盤になると考えられる。また、2級漢字に限定した場合の対応関係において、全体の対応関係の6つの特徴がどのように具体的な形で表れているのかについても分析し考察した。その中で特に注目すべき点として、呉音と漢音では、異なる対応が多くあることが挙げられる。 第4章では、多音字（本研究では日本漢字音を2種類以上持つ漢字のことを意味する）を除いた2級新出漢字の現代中国語音と日本漢字音の基本対応規則及び補助対応規則を見出した。具体的には、4.1では、これまでの日本語教育の中で、現代中国語音と日本漢字音の対応関係に注目し、それを日本語教育現場に活用しようとする先行研究を概観し、問題点を考察した。それらの問題点を踏まえた上で、4.2から4.5では、旧試験3級レベルの中国語話者が2級新出漢字の日本漢字音を効率よく学習するには、第3章の3.1で導き出した現代中国語音と日本漢字音の対応関係をどのように	

提示すべきかについて検討した。その結果、まず、慣用音字(72字)についてはそのまま覚える。次に、残った漢音・呉音字(687字)については、漢音の主たる対応関係を基本対応規則とし、呉音の特徴や現代中国語音の特徴を補助対応規則とすることで、効果的な学習が可能になると予想された。

第5章では、日本漢字音習得の実態を調査し、日本漢字音習得上どのような問題点があるのかを分析・考察した。具体的には、2級新出漢語に限定し、新試験N4以上N2以下(旧試験3級レベルに相当する)の中国語話者を対象に、学習者の確信度に着目し、1)確信度と正答率の関係、2)確信度に影響を与える要因、3)確信度別の誤答パターンを明らかにし、日本漢字音習得上の課題を検討した。その結果、1)確信度が高いほど正答率が高いという相関関係があること、2)確信度は当該漢字・漢語が既習か未習かに大きく依存することが分かった。そして、第5章の分析結果として特に注目すべきは、3)主な誤答パターンは確信度によって異なることである。誤答パターンの分析結果から、確信度と関係なく存在している共通の問題点(清濁と音訓)もあるが、その他の相違点もあることが明らかになった。すなわち、この確信度による個別の問題点としては、長短・多音・母音の交代・子音の交代・入声韻尾・撥音が挙げられる。以上の分析結果から、以下の2点が指摘できる。①共通の問題点も個別の問題点も漢語レベルではなく、漢字レベルで起こっていることである。このことから、漢字レベルの問題点が解決されれば、中国語話者にとって日本漢字音はより一層効率的に習得できると考えられる。②日本漢字音習得の実態(つまり、既習漢語の習得状況、既習漢語の未習漢語への応用力、完全な未習漢語を推測する力)が中国語話者の確信度に表れているため、今後日本漢字音習得について研究する際、確信度という尺度を含めて検討すべきだと考えられる。

第6章では、第2～4章(第一段階)で明らかにした基本対応規則などの対応関係と、第5章(第二段階)で明らかにした日本漢字音習得上の問題点をどのように組み合わせて利用すれば、効率的に学習できるのかについて検討した。具体的には、日本漢字音習得における漢字レベルの問題点に、漢語レベルの問題点(促音化、連濁、促音化・連濁)を加えて、それぞれの解決法について検討した。その結果、これらの問題点は、第2～4章までの分析結果を活用することで解決可能なものがほとんどであることが明らかになった。また、それ以外の問題点についても、第6章で改めて分析・考察し、解決法を提案することができた。さらに、学習者が効率的に学習できるように、以上の問題点とその解決案について、学習課題の構造化を行った。

第7章では、第6章で示した学習課題の論理構造に基づき、試作品としてのWEB教材の作成及び教材改良に向けた検討を行った。具体的には、WEB教材を試作し、その学習効果をみるために調査を実施した。その後、学習者の学習記録、確信度、正答率について分析し、教材の改良に向けた検討を試みた。その結果、試作したWEB教材の学習効果は学習者の確信度と正答率に表れている。また、様々な日本語能力(特に新試験N4以上)を有する者からの評価が高く、教材の出版を期待する学習者もいることが分かった。一方、教材の改良について、特に重要となるのは、学習の前提となる条件を明示することである。その条件としては、1)ある程度の中国語のピンイン知識と日本語の語彙を身につけていること、2)日本語を学習する際の媒介語が中国語であること、が挙げられる。さらに、教材の改善点として、ピンイン表の追加、解答例の追加、復習用の重要項目のまとめと練習問題の追加、一回の学習時間を20分程度に設定することが挙げられる。

第8章では、本論文をまとめ、本研究の意義と今後の展望について述べた。従来の日本語教育の研究には、現代中国語音と日本漢字音の関係性に注目し、それを日本語教育に活用しようとする研究が数多くある。しかしそれらは、多くの対応規則を羅列するに留まり、教育実践には利用しがたいものが多かった。本研究は、現代中国語音と中古音、中古音と日本漢字音に関する先行研究を整理し、中古音を介在させた上で、日本語教育に利用可能な「基本対応規則」を中心とする現代中国語音と日本漢字音の対応規則を提案することに成功した。そして、中国語話者を対象に、確信度を含めた日本漢字音習得の実態を調査し、習得上の課題を明らかにし、その解決策を具体的に提示することができた。さらに、以上の研究成果に基づき、2級漢語と2級漢字に限定し、日本漢字音学習WEB教材の開発を試みた。その結果、正答率や確信度の向上から学習効果のあることが確認できた。また、学習者との直接のやり取り及びアンケートでは、教材に対し、高い評価を得た。筆者の関心は主として現代中国語音を活用して日本漢字音の学習を改善するための妥当で有効なシステムを開発することにあるので、今後は本研究の成果をさらに活用した日本漢字音教育の実践的研究を行う予定である。また、本研究の分析結果及びWEB教材作成の技術を応用し、現代中国語音教育のための教材開発も行う。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (汪 南 雁)			
論文審査担当者	(職)		氏 名
	主 査	教授	坂内 千里
	副 査	教授	西口 光一
	副 査	教授	細谷 行輝

論文審査の結果の要旨

汪氏の学位請求論文は、中国語を母語とする日本語学習者（以下、中国語話者）を対象とする日本漢字音教育のための基礎的研究として、以下の３段階に分けて現代中国語音を活用した日本漢字音教育・学習方法を論じたものである。第１段階（第２～第４章）では、教育現場で活用可能な現代中国語音と日本漢字音の対応規則を導き出し、第２段階（第５章）では、実態調査に基づき、日本漢字音習得上の問題点について分析・考察し、第３段階（第６・７章）では、第１段階で導き出した対応規則などを利用して第２段階で明らかにした問題点をいかに効率的に解決するかにつき考察し、その結果に基づいたWEB教材の試作及びその改善策の考察を行なった。

第２章では、先行研究に基づき、中国語の中古音と現代音の対応関係、及び日本漢字音と中国語中古音の対応関係を整理した。第３章では、中国語中古音を介して現代中国語音と日本漢字音の対応関係を導き出し、その特徴を考察し、「a韻母」「ia韻母」などの18韻母で読む漢字は「ク/ツ/チ/キ」で終わる可能性があることなど、新たに６つの特徴を明らかにした。更に、旧日本語能力試験２級漢語で使用されている漢字（以下、２級漢字）に限定して、現代中国語音と日本漢字音の対応関係を導き出した上で、先に中古音を介して導き出した漢字全体に適用可能な対応関係と比較し、両者の対応関係は概ね一致することを明らかにした。従来の研究が対象を常用漢字などに限定して直接現代中国語音と日本漢字音の対応関係を求めようとしていたのに対し、本論文が中古音を介在させることにより、その全体像を明らかにすることができた意義は大きい。第４章では、従来の日本漢字音教育の問題点を踏まえ、前章で導き出した現代中国語音と日本漢字音の対応関係を教育現場において効率よく活用する方法を考察した。そして対応率という視点を導入することにより、対応規則の中で基本となる対応規則とそれ以外を区別し、より現実的な規則を見出すことに成功した。また、日本漢字音の層的伝承という特徴に注目して中国語現代音との対応関係を整理し、漢音の主たる対応関係を基本対応規則とし、呉音の特徴などを補助規則とすることの優位性を明らかにしたことも、高く評価できる。第５章では、実態調査に基づき、日本漢字音習得上の問題点について分析し、主要な問題点が漢語レベルではなく漢字レベルで起っていることを明らかにし、また日本漢字音教育において学習者の確信度という尺度を導入することの重要性を明らかにした。第６章では、日本漢字音習得上の問題点を解決するために、第４章で導き出した対応規則などを利用した学習方法を検討し、学習課題の構造化を行なった。第７章では、学習課題の論理構造に基づきWEB教材を試作し、更に学習効果を調査して、教材の改良策を考察した。このWEB教材は、本論文の理論的側面を実証的側面から下支えしているという意味においても評価が高く、今後の進化が期待される。

このように、本論文は日本漢字音教育に利用可能な現代中国語音と日本漢字音の対応関係を導き出し、試作段階とは言え実際の教育に活用する方法を考案することに成功した。学習課題の解決に対する学習メディアの有効性が十分に論じられていない点など、若干の課題はあるが、それらは決して本論文の価値を損なうものではない。

以上により、本論文は、博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。

なお、本論文について、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿等のチェックを行い、問題がなかったことを付け加える。